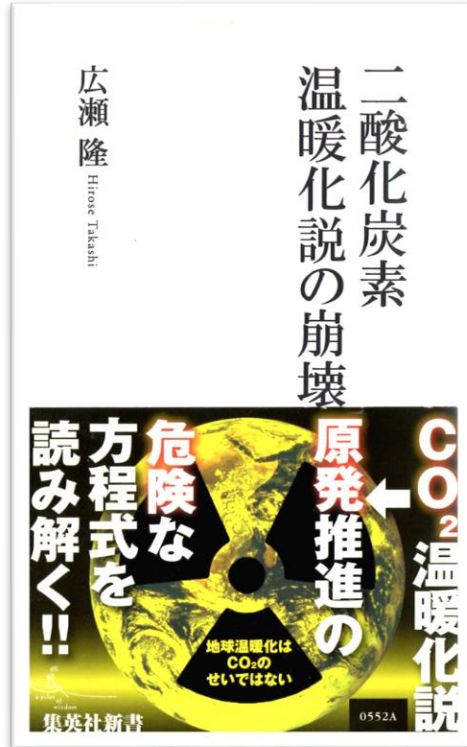


# 第1章 二酸化炭素温暖化論が地球を破壊する

## クライメートゲート事件

2009年11月24日の‘ニューヨーク・タイムズ’に、IPC Cの聖書となったアルバート・ゴアの著書「不都合な真実」を積み上げて、次々と暖炉にくべて暖をとる夫婦の姿が描かれた。アメリカの漫画家は、総じてCO<sub>2</sub>温暖化説の信奉者なので、何を意味しているのか初めは分からなかった。「アル・ゴアはいまだに人為的な地球温暖化は本当だと言い張っている」とテレビの女性キャスターが揶揄する漫画まで、次々に出るのは奇妙であった。また、鳩山由紀夫らしき日本兵が鉄砲を握って「私は第二次世界大戦で、まだ戦っている最後の日本兵だ」と言えば、「ちょっと忠告したいのだが、気候変動は嘘だよ。ここは寒いぜ」と諭す漫画も出た。日本の総理大臣が世界中で笑い物になっている図である。何が起ったのだろうか。

2009年11月17日、イギリスのイーストアングリア大学にある気候研究ユニット(Climatic Research Unit---CRU)のサーバーから、送信メール1073件と、文書3800点がアメリカの複数のブログサイトに流出し、世界中が驚愕する「気候データの捏造」という世紀のスキャンダルが発覚したのである。日本では無報道に近いが、年が明けた2010年2月には、100年ぶりという記録的な大雪に見舞われて震えあがるワシントンの議事堂前にエスキモーの雪の家が作られ、「アル・ゴアの新居」と書いた看板が立てられた。欧米のメディアは、「灼熱のペテンが破綻する」‘ワシントン・タイムズ’、「気候変動を論ずる学者グループは、今やまったく支持されていない’ウォールストリート・ジャーナル’、「気候の同意が崩壊」‘ニューヨーク・ポスト’と、IPCCがおこなってきた悪質な気温データの捏造を次々と暴き出した。



日本の科学誌「科学」2010年3月号と5月号で、東京大学の渡辺正教授が詳細にこの事件を解析しているの、図書館で読みたい。事件の要点を記す。気温データの捏造を指令してきたこのCRUという機関は、単なるイギリスのグループではなく、気候変動の研究に従事する世界的な学者たちの司令塔であり、NASAのゴダード宇宙研究所と共に世界中のデータを集めて解析してきた。つまりCO<sub>2</sub>温暖化説を広めてきたIPCCの理論とデータが、巨大な化学的「嘘」によって作られていたことが明らかになったのだ。それで、かつてニクソン大統領が辞任に追い込まれたウォーターゲート事件と気候(クライメート)をもじって、「クライメートゲート(Climategate)」と呼ばれるようになった。このスキャンダル発覚で重要なことは、アメリカのメディアが自ら反省しているように、「氷河は実際には融けていない」、「気候の予測は外れて、しかもデータは証拠不十分なものばかり」、「ここ10年は気温は上がっていない」、「コンピューター・モデルは自分の好きなように予測データを強調している」という山のような事実があったにもかかわらず、「メディアはこうした批判を長い間無視してきた。しかし今や、われわれは、これらの批判に追いついた」ということである。ところが、日本のメディアは、北海道新聞を除けば、はるか後方であって、追いかける気配さえない。

ここで暴露された気温データ捏造に関わる悪質問題メールの送信者27人のうち実に19人が、IPCC報告書「自然科学的根拠」分冊の執筆者と編集者であった。しかも報告書の実質的な執筆者は数十人で、それをもとに、ひと握り(2、3人)の米英の英語圏のリーダー格が最終原稿を書き上げ、それを全世界が信じこまされてきた。この親分が詐欺師であったのだ。

CO<sub>2</sub>温暖化説の最強の根拠となってきたのは、ホッケー・スティックと呼ばれるグラフである。グラフの形が、ホッケーのスティックに似ているので、そう呼ばれた。1998年4月23日発行のイギリスの科学誌「ネイチャー」に、いずれも気候学者であるマサチューセッツ大学(のちペンシルバニア大学)のマイケル・マン、マサチューセッツ大学のレイモンド・ブラッドレー、アリゾナ大学のマルコム・ヒューズが、「過去6世紀にわたる地球規模の気温の傾向と気候強制」と題して発表した最初の論文が第一弾であった。さらに3人は、翌1999年に400年分のデータを加えて、過去1000年の気温変化をとして発表した。その図は一目瞭然、気温は20世紀に入ってから急上昇していることを「証明」していた。これが、CO<sub>2</sub>温暖化説を主張するIPCCによって恰好の「証拠」として採用され、国連の世界気象機関(WMO)から発表されて、一気に「20世紀温暖化説」が世界中のメディアを席卷し、2001年1月のIPCC第三次評価報告書で6か所に掲載され、「人為的CO<sub>2</sub>温暖化

の決定的証拠」となり、最重要の論考として高い評価を与えられた。クライメートゲート事件とは、このグラフが捏造だったという捧腹絶倒の物語である。

もともとこのグラフがデタラメであることは、発表当初から私には分かっていた。これから事実をくわしく紹介するが、私は子供時代から考古学者になりたかったので、若い頃に読んだすぐれた書籍から地球の歴史をそれなりに知っていた。それらの書物は、数えきれないほどの探検家、考古学者、物理学者、生物学者、地質学者、天文学者、文化人類学者たち、先人の血と汗の結晶として、中世の温暖期やその後の小氷期という歴史的事実を明らかにしていた。ホッケー・スティックがわずか一枚の紙きれでそれを全否定したのだから驚いた。

しかし私はこの時、誤ったCO<sub>2</sub>仮説を信ずるヨーロッパ人、特にドイツの自然保護運動家たちが、人類のエネルギー消費削減をめざして具体的に取り組み、放射能を出す原発も徹底的に攻撃していたので、その言動にまったく異論はなく、同じ目的地をめざして歩いていけると思い、CO<sub>2</sub>温暖化説が蔓延しても軽視してきた。その私の判断が、大間違いであった。

犯罪摘発の原理を考えてみればよい。二酸化炭素の冤罪事件であれば、凶器を持った真犯人が逃げおおせるという危ないことになる。今の人類は、NHKを筆頭とするテレビ番組、テレビコマーシャルが示す通り、CO<sub>2</sub>を減らせば環境を守れるという幼稚園児レベルの知能しかない。ヒートアイランド、原発の放射能災害、発電所の温排水、砂漠化、野生生物危機、大気汚染、水質汚染、酸性雨、熱帯雨林の破壊、遺伝子組み換え食品、環境ホルモン、食品添加物、農薬、ダイオキシン汚染、増え続けるゴミ、大地震の脅威、戦争など、ありとあらゆる環境破壊と毒物生産を放任して、すべて無実のCO<sub>2</sub>にその罪をなすりつけ、人類が大規模な環境破壊に踏み出し始めた。

20年前、1990年のIPCC第一評価報告書に掲載された過去1000年の気温グラフは【図8】であり、この気温変化が、ほかのどの書物にも出ている正しいものである。【図7】のホッケー・スティックとまるで違うことは、誰が見ても分かる。【図8】の通り、中世には「20世紀よりもはるかに気温が高い」温暖期があり、そのあと小氷期が襲って気温が下がり、その後、人類がまだCO<sub>2</sub>をほとんど出さない19世紀つまり1800年代初めから半ばにかけて自然に気温が上がり始めたことは、考古学者、文化人類学者、天文学者、が

知っている長い間の常識であった。マイケル・マンたちは、あろうことかこの山と谷を消してしまい、平らに削ってスティックの真っ直ぐな握り棒に変えて、最後の部分だけが「異常な気温上昇だ」と呼び始めたのだ。世界中がそれを信じたのだから、新興宗教まがいの科学崩壊のおそろしさはここにある。

そのトリックについて「うまくだました」とはしゃぐメールが大量に流出し、当人たちがそれを認めたのが、クライメート事件であった。IPCC司令塔CRUの所長フィル・ジョーンズが、ホッケー・スティック発表直後、そのグラフ作成者3人に宛てたメールの一つが【図9】である。「マイケル・マンのトリックを完成した」と書いている。

トリックの実例を見よう。日本の気象庁に相当するニュージーランドのNIWARは、ICPP第四次評価報告書を執筆した権威の一つだが、これまで【図10】のグラフを公表してきた。本書冒頭に示した【図2】と同じように、過去156年間の気温は、20世紀に入ってから一直線の上昇を示している。地元の科学者たちが、スキャンダル発覚後にオリジナルデータを調べたところ、実際の数値は【図11】であり、気温は上下に変動しているだけで、まったく上昇していなかった。グラフがどうしても右肩上がりになったかと言えば、このニュージーランド気象庁は、過去の温度を「調整した」のだという。つまり【図12】のように、左端のオークランドから始まる7か所の測候所の気温が、矢印分だけ調整されていた。気温とは、測定したあと、猿知恵を働かせて調整するものらしい。上昇している6か所における100年間の調整分を、オリジナル・データから私が計算してみると、平均0.71℃も引き上げられていた。現在までIPCCは、「100年間で地球は0.7℃も気温が上昇した」と騒いできたのに、オリジナル・データを0.71℃引き上げていたのだ。なんと、「人為起源の温暖化」とは、人為起源の温室効果ガスCO<sub>2</sub>のことではなく、「人為的なデータの書き換え」が原因であった。

ニュージーランドだけでなく、続いてオーストラリアでも「長期記録の40%近くはヒートアイランドの起こっている大都市の温度」を採用していたことが発覚した。みな、旧大英帝国グループだ。北欧では、IPCC報告書に使われた「実測値」が存在しない捏造データであることが明らかにされた。ロシアでは、「上昇した気温データだけ」が使われ、それを除く75%の気温データが削除されていた。正しくこれらの全データでグラフを描いてみると、20世紀後半のソ連・ロシアの気温は、ニュージーランドと同様に、上下動してるだけで、気温上昇は起こっていなかった。

そしてついに2010年2月13日には、問題のメールを書いた張本人フィル・ジョーンズが、イギリスBBC放送の質問に答え、「中世に地球規模の温暖期があったなら、20世紀後半の温暖化は異常ではない」と認めた。ホッケー・スティック図は、この事件の前から世界中の科学者から批判され、2007年末に出されたIPCCの最新の第四次評価報告書で削除された恥すべきものである。しかもそこにデータ捏造によるトリックがあることが明らかになった現在、IPCCが繰り返し語ってきた「今日の気温は近代産業による明らかな結果だ」という主張が完全に崩壊したわけである。しかもジョーンズは、「過去15年にわたって、統計的に有意な温暖化は起こっていない」とも認め、こうして山のような事実の前に所長辞任に追い込まれた。メール交信で不正が明らかになったIPCCの自称「学者」たちは、メディアに追及されても主張の論拠となった科学的データを出さないため、各国のメディアに怒りが広がり、ますます信頼が失われている。

2009年12月7日からデンマークのコペンハーゲンで開催された「温暖化に対する国際的枠組みを決める国際会議」COP15は、ヨーロッパが猛烈な寒気に襲われて凍死者が続出するなか、それをしのぐ暖房で地球を熱しながら会議を開いて、スキャンダルが発覚して大騒動になり、デンマークのCOP担当大臣が辞任に追い込まれ、鳩山由紀夫は物笑いの種にされ、何も決められずに散会した。2010年1月にはIPCC議長のラジェンドラ・パチャウリが、温室効果ガスの排出権取引で莫大な利益を得ている銀行の顧問をつとめていただけでなく、この取引で多国籍企業とエネルギー業界が生み出す資金を、パチャウリ自身が理事長・所長をつとめる「エネルギー資源研究所」に振り込ませていた醜悪な人間であることが発覚した。この温室効果ガスの排出権取引とは、「金持ちはCO<sub>2</sub>をたくさん出していい」という馬鹿げた「地球を愛する」ルールなのである。

温暖化と海面上昇が深刻に議論されている時代である。オランダは国土のうち海水面より低い部分(海拔下)の面積が26%もあるので深刻だと言われてきた。そこでオランダ政府がこの正しいデータをIPCCに提供していた。ところが、IPCCの第四次評価報告書では編集過程で、26%が55%の2倍に水増しされていたことが発覚し、オランダ政府がIPCCに訂正を求め、このような「嘘が書かれた過程」の説明を要求した。そして2月18日には、IPCCを仕切る国連気候変動枠組条約のトップであるイヴィ・デブア事務局長が辞任を表明したが、彼はオランダ人である。

IPCCとは、自分たちがものを言えば世界中が動く、と信じてきた天動説の集団だったのである。しかし正しく地動説に従って日本をのぞく世界中のメディアが動き出すと、狸の

尻尾が見え、化けの皮がはがれて、冥王星と同じように「惑星ではない」と断定され、今では六等星の輝きもない。

哀れな末路をたどったこの人間たちのことは、どうでもよい。私が読者に尋ねたいのは、このように欧米では深刻な報道の洪水が続いて、もはやまともな人間の誰もCO<sub>2</sub>温暖化説を信じていないことを、ご存知だろうか、ということである。日本に報道機関はあるのだろうか、という末期的な疑問なのである。クライメートゲート・スキャンダル渦中で、それを覆い隠すバンクーバー・オリンピックが開催され、それにはしゃぐのが報道の姿だった。滑稽なのは、正規のスキャンダルに口をつぐんで、「あしたのエコでは遅すぎる」と繰り返すNHKを筆頭とする日本のメディアの知性である。彼らが「地球を愛していない」偽善者であることだけは断言できる。民主党内閣が、温室効果ガス削減を謳って、地球温暖化対策基本法の制定に向かって動き出し、大量の排熱を出す原発の増設に猛進しようとしてきた。この内閣の知性が世界中で失笑を買った通り、日本は孤島となっているのだ。日本人全体が、この「考えない葦」メディアと政治家のため、無知という名の島に置き去りにされている。インターネットは、本当に発達したのか、インターネット辞書として多用されているWikipediaが、CO<sub>2</sub>温暖化説の広告塔だったことも、現在では強く批判を浴びている。地球科学の事実を知るために、大半の読者はインターネットが必要だと思っているだろうが、それも思い違いであることを、過去の資料から実証してゆこう。